渦中の農力

度重なる異常気象や未知のウイルスの流行など、波乱な情勢となった2020年。過酷な事態のなかで、生産者は何を思い、何を行ったのか……2020年の栽培過程を振り返りながら、渦中から未来を見据える生産現場のすがたに迫ります。（4号連載予定／第3回）

ネギ

農事組合法人 ファーム北野

のうじくみあいほうじん・ふぁーむきたの潟上市天王出戸地区の15戸で構成され、ネギ1・6ヘクタールと水稲31ヘクタール、大豆15ヘクタールを栽培する。代表者は菊地福一郎代表（82）。佐藤久志監事（73）（写真）がネギ担当理事を務める。

――2020年度のネギの栽培についてお伺いします。

今年度は全て段ボールで、秋田と横浜へ11月下旬まで出荷を行いました。雪が降る前に全て終えることができて、安堵しています。次の7月に出荷するためのネギの播種作業を10月下旬に終えたため、今はハウスで苗の管理を行う時期になります。

――天候によるネギの生育への影響はありましたか。

ネギは長雨だと病気がつきやすくなります。ただし、この地域は砂地のために水はけがよく、雨が上がれば作業ができるようになるほどですから、農作業への大きな影響はありませんでした。病害虫でいえば、今年度はチョウ目類を、特に3、4枚目の葉に潜っている姿を多く見かけました。「これは」と疑問に思って見ると虫がいることが多く、少しでも怪しいと思ったらしっかりと確認するように心掛けました。

圃場の様子を確認して適期に作業できるようにするため、圃場に看板を立てて作業履歴を記録しています。紙媒体で記録したこともありましたが、圃場の状態を見な